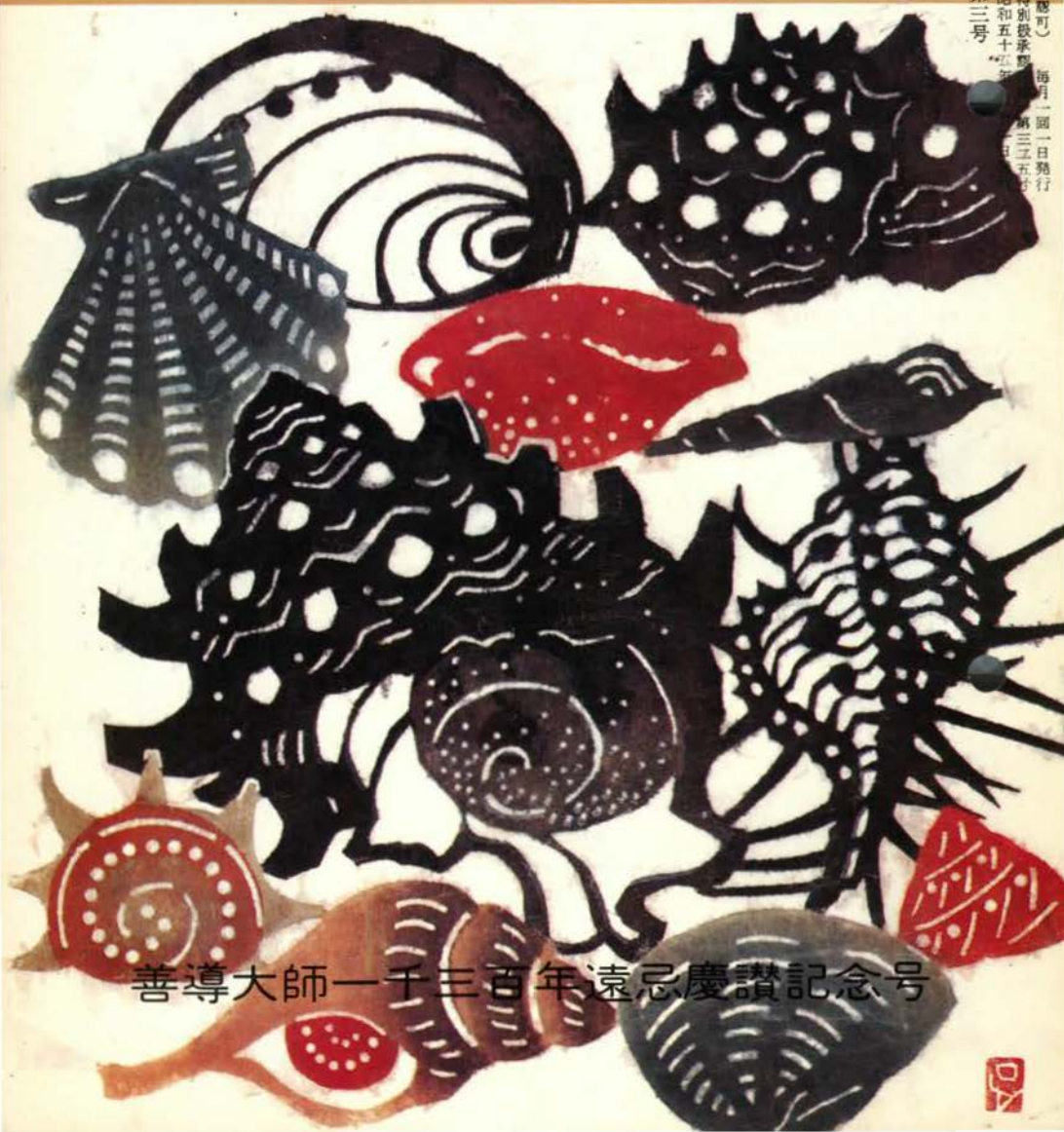


淨土

1980-3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一週一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別殺承認) 第三五五
昭和五十五年二月二十五日印刷 昭和五十五年 第三号



目を挙げて女人を視ず

釈尊八十歳入滅の前後を記した經典の一つに『大般涅槃經』があります。入滅の近いことを知った弟子たちに、「我れ亡き後は自らに依れ、法に依れ」とさとされたという有名な、自燈明・法燈明の遺戒もこの經に説かれて

ています。

その經典の中に、——恐らくは後代の附加と思われませんが——唐突として次のような一節が見られます。

釈尊と、待者アーナンダ（阿難）との問答です。

阿難「世尊、我等は女人を如何にすべき

や」

釈尊「阿難よ、見ることなかれ」

阿難「世尊よ、見たる時は如何にすべきや」

釈尊「阿難よ、話すことなかれ」

阿難「世尊、されど話しかけられたる時は如何にすべきや」

釈尊「かかる時は、阿難よ、警戒してあれ」

（平等通昭 訳）

仏教々団は出家の比丘・比丘尼、在家の信

士・信女の四衆を基本として成り立っていますから、釈尊が故意に女性を蔑視していたとは考えられません。しかし、釈尊が最初の比丘尼となつた養母マハーブラジャーパティの出家に対し、非常に慎重な態度を示し、阿難のとりなしで、ようやくそれが許されたとする伝承も事実のようです。

人間は色々な欲望をもつた生物です。その中で性に関する欲望は、古くから出家者たる者が第一に心すべきものとされて来ました。釈尊が悟りを求めてネーランジャラー河のほとりで瞑想にふけていた間も、三人の魔女が種々に姿を変えて誘惑にあらわれたとされています。釈尊の心の中にも、性に関する欲望との葛藤がうずまいていたのかも知れません。

ここで我々は、浄土教の祖の一人、唐の善導大師について言い伝えられている一句、「〔釈善導〕戒品を護持し、纖毫も不犯なり、曾つて目を挙げて女人を視ず、一切の名利に無心なり」を、あらためて思いおこしたいと思います。

（佐藤良純）



三月号



深信とは、仰ぎ願わくは、一切の
行者等、一心にただ仏語を信じて
身命を顧みず、決定して依行せよ。

——『選撰本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.101)

目次

特集 善導大師一千三百年

遠かりし終南山への道(一).....	稲岡 覚順	…(2)
善導大師の孝道論.....	佐藤 密雄	…(5)
善導大師のみ跡を慕いて.....	藤堂 恭俊	…(10)
善導大師のお言葉を戴いて.....	遠田 弘俊	…(15)

彼岸俳談.....	細田 隆善	…(20)
-----------	-------	-------

勝 縁.....	服部 仙順	…(32)
----------	-------	-------

＜随想＞「おどじ」と「まるじょう」.....	合 島 近	…(26)
------------------------	-------	-------

浄土句集.....	一田 牛畝選	…(30)
-----------	--------	-------

＜表紙のこたば＞貝寄せ.....	土屋 正男	…(25)
------------------	-------	-------

＜表紙裏・巻題言＞目を挙げて女人を視ず.....	佐藤 良純	
--------------------------	-------	--

念仏ひじり三国志①——法然をめぐる人々.....	寺内 大吉	…(37)
--------------------------	-------	-------

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

特集 善導大師一千三百年

遠かりし終南山への道(一)



大本山金戒光明寺法主

稲岡覚順
いな おか かく じゅん

るあこがれの聖地である。

山西玄中寺において、師道緯に死別した善導は、山西をあとにして、帝都長安の南、終南山に戻られた。

終南山における善導の三十余年に及ぶ自行化他の道は

一 終南山への思慕

終南山、それはわれ等浄土門徒にとっては思慕やまざ

峻敵そのものであったが、化縁薪つき、唐の永隆二年三月十四日、六十九歳を一期として世滅された。

直弟子隆闡は帝城の南、神禾原に寺（香積寺）を建て、十三層の墓塔を建て、師の遺骸を葬った。

隆闡の弟子浄業は、香積寺主となり、門下に遺命して善導の墓塔の側に、陪葬せしめたと伝えられている。

従って終南山神禾原こそは、日本浄土教徒にとっては善導を偲ぶ重要な霊蹟である。

ところが、この思慕やまざる終南山の史蹟には、今まで日本浄土教徒は誰一人として、足を踏み入れた者もなく、墓塔を拝した人もなく、正に千年の謎として眠り続けていた。

私の先輩で中国仏教史研究の大家、塚本善隆先生はこの実情を歎かれ、日中仏教協会の機関紙一号に、一つの懇願要望なる一文を草せられ、神禾原の精密調査と遺物保存方について、中国側に熱烈な願望を訴え、その末尾に次のように述べられた。

「私のような老学（先生は本年八十二歳で急逝された）が現身で終南山神禾原を訪ね得ようとは思わぬが、自らの死

近きに際し、われわれ数千万の浄土諸宗の僧尼と信者に対して、神禾原参拝の機会がめぐまれる日が来るならば、私の生前におけるこれに過ぎた喜びはない。云々」

この先生の願望を私は涙の中に読んだ。そして何としてもこの願望を果さねばならないと決意した。これこそ何よりの遠忌報恩事業でもあるからだ。

二 終南山への道拓ける

昭和五十二年十月、私は日中友好仏教協会第二次訪中団の一員として参加した。

時あたかも浄土宗では、昭和五十五年に迎える善導大師遠忌記念として、日中兩國の親善を促進し、併せて中国における祖蹟参拝の道を拓くべく、日本既成宗教等にさきがけて日中友好浄土宗協会を設立した直後であったので、私の訪中に際しこの旨を中国側に伝えると共に、浄土宗代表団の訪中実現方法を、中国当局に要請することとなった。

中国仏教協会の趙撲初先生は、浄土宗協会設立のこと

を大きく評価され、随所の挨拶の中に、必ずこの事にふれられた程であったが、十月十一日北京飯店における歡迎レセプションの席上、趙樸初先生は次の如き注目すべき発言をなされた。

「私は皆様に私達の尊敬する古い友人である塚本善隆會長に伝えて頂きたい一つのことがある。

それは即ち彼が関心をよせている、善導大師の墓塔と香積寺の遺蹟は整理するつもりである。今後一定の条件が整えられれば、私達は共に参拝する念願が実現するであらう」

と。正に塚本先生の至誠が通じた朗報である。日本の全浄土教徒の願望に応えられた、中国側の好意の現われであった。

三 祖霊と涙の対面

昭和五十三年四月、趙樸初先生は全日本仏教界の要望に応えられて来日し、知恩院を訪れた折、香積寺十三層

の墓塔の写真、玄中寺出土の阿弥陀仏像、その他数々のおみやげに添え、浄土宗代表団訪中の招待状を持参されたのである。

私共の待望した訪中実現の便りである。正に天にも登る喜びである。これによって祖廟参拝の道は約束されるからである。

この中国側の好意により浄土宗代表団三十一名は欣喜雀躍、十月六日大阪空港を離陸した。そして月こそ変われ、高祖のご命日十四日の正中、ついに祖廟前に涙のご対面が許されたのである。

西安から西南二十キロと云われる神禾原までの道なき道は、われ等のために突貫工事で自動車の通れる道となった。又荒廃していた香積寺の圯城も整理の跡がなまなましい。

まことにこれは、一重に中国側の好意にみちた配慮の結果であった。

そして、この一行中には老驢を拝して、現身の塚本先生も加わっておられたのである。

(つづく)



善導大師の孝道論

佐 藤 密 雄
さとうみつお

(元大正大学学長・文庫
鎌倉大仏殿高徳院住職)

(一)

初めに一言。椎尾弁匡全集中に「来る昭和五年が、大師の千二百五十年忌にあたる」とあるから、これは昭和四年頃のことである。椎尾大僧正はその中で、「日本仏教の中には浄土門の一派があつて、法然上人によつて流れたものであるが、(法然)上人は偏依善導といい、その宗旨では阿彌陀仏を奉安する西脇に、善導大師と法然上人とをまつり、人格的偶像として拜んでいる、という意味の簡単なパンフレットをシナ(中国)に配つたところ、(中国側に)大衝動をおこさしめた。自分(中国)の方で看過せるものを、日本に於て供養讃嘆していること

を知り、ことに一昨年来朝せるシナ(中国)の僧侶居士等は、増上寺や知恩院に行き乍ら、そのことに気付かず帰つて来たことを残念がつた」と述べられている(椎尾弁匡全集四卷)。昭和二年に来訪した中国の王一亭・木虚等の僧侶居士達との、その後の交渉の展開が、日中兩國に本部を持つ日華仏教協會の設立を促し、両国仏教徒の同時・同願の念仏会となり、やがて林彦明大僧正の北京駐在や神林遇道上人の中国に於ける活動となつたのである。時は過ぎて五十年、ことに當つた人々はすべて他界された。今、千三百年の善導忌を向えるにあたって、中国側が香積寺を復興したことについて、このことが殊更に意味深く想起されるのである。当時大正大学に入った

ばかりであった筆者であったが、神林週道老に厄介になることが多かったのかかわらず、その詳細を知らないのは残念である。然し、現在山崎良順君の、長野県の中観山同願院昭和寺は、この日中同願念仏の伝統を継ぐことを創建の趣意とするものである。

(二)

さて仏教が中国に入って、初めに非難されたことの一つは、仏教は孝道に反するということであった。孝道こそ中国倫理の根本である。そこで仏教が中国に定着するには、先づ「仏教には孝道あり」と知らしめることであった。『父母恩重経』が、その成立について種々と議論があるが、それでも、中国・日本で重要視されるのは、日本・中国の世俗の宗教観に孝道の倫理が欠くべからざるものだったからである。

『観無量寿経』の序分に「彼国（浄土）に生ぜんと欲せむ者は、まさに三福を修すべし。一つには父母に孝養し、師長に奉事し云々」として、以下に、戒福（戒律を守る）と行福（発菩提心等）とが述べられている。経文には、孝養父母、奉仕師長は世福で、戒福・行福と併せて

三福とされ、三福は浄土に生ずる浄業であり、正因であるとして置かれている。これは中国仏教にとっては、まことに重要な経文であった。善導大師は、『観経疏』の第二巻の序文義で、これを解釈されている。これは、浄土宗や浄土真宗の宗義信仰としては肝要の場所ではないが、浄土教徒の日常の世俗の生き方としては肝要となるものである。今は、その孝養父母という一句についての大師の解釈を見ようというのである。

『観経』に、この孝養父母の言葉のあることは、中国に浄土教の布及するには極めて有効であった。経文が孝養父母をふくめた三福をば、「三世諸仏の浄業の正因なり」とするのであるから、また、それ故に、孝養ということも浄土に生ずるための浄業だといっているのであるから、孝養第一の中国民衆にとって、『観経』はびつたりの經典だったことになる。

そこで、大師の解釈であるが、父母に対する孝養について、大師は「既に父母あればすなわは是大恩あり、若し父なくば能生の因なく、すなはち欠けん。母なくば所生の縁はすなはち乖（か）く。若し二人俱になくば、すなはち託生の地を失はん云々」とされる。人身を受けてこ

そ、仏教をきくを得るのであるが、またそれ故にこそ受け難き人身であるが、それは仏教的に言えば、自業を内因とするものである。然し、内因だけでは実らない。これを実らせて人間処に生れ育つには、外縁が必要である。人間として現実を生れるのは、全く父母の外縁によってである。そこで善導大師は、「父母の恩は重し」と述べられるのである。

母は懐胎し已って、十月を経るまで、行住坐臥に常に苦惱を生じ、産時の死の難を憂う。若し生じ已れば三年を経るまでに、尿に眠り、尿牀に臥す。被る衣服は皆不浄なり。

其の「子」長大なるに及べば、婦「女等」を愛し、「女は」兄と親んで、反って「父母に」憎嫉を生ずる。「この如くに」恩孝を行はざる者は、即ち畜生と異ること無きなり。

としている。このことは、『父母恩重経』に述べられるところとはほぼ等しい。凡そ子供は、ようやく長大になると、男女とも異性を愛して、反って父母に憎嫉を生ずることは、中国でも日本でも、善導大師の時代も今日も、世相としては、全く変わっていない。

(三)

善導大師の孝道論を示す言葉に、「父母は世間福田の極なり。仏は出世間福田の極なり」とある。それは、ある場合には仏に供養するよりも、父母に供養する方が、すぐれている、という解釈となっている。このような見方は、私共の注目に値し、かつ考えさせられる点でもある。

善導大師は、ここで、仏陀時代の飢饉の時の話を述べている。仏陀の在世の時代のこと、飢饉がつづき、餓死者が出て「白骨縦横」であった。仏陀は行乞に出られても、一飯も得られない日が続いた。この時に一比丘（仏弟子）があつて、なんとしても仏に一飯を捧げたいと思ひ、ついに自分の三衣（法衣）を売って一食を得て仏に奉った。然しこの時、仏陀はこの食を受け取られなかった。この時に、仏はその比丘に述べられた。「比丘の三衣は三世諸仏の幢相（標識）である。この尊い三衣による食を自分には受け取れない。汝の心は大いに領（理解）するも、我には、此の飯を消（化）することは出来ないからである」と答えられた。仏陀は出家者としての立場から

拒まれたと考えられる。比丘はこの仏の答に驚き、「仏は三界の福田の中でも、聖の中の極である。仏を除いて誰かよく消（化）するものがあるか」と述べたが、その時に「汝に父母があるか」と仏が問われた。比丘は「あります」と答えつつも、仏の消（化）されないものを、父母がこれを消化し得る筈はないと述べたのであるが、この時仏陀は、

父母は汝の身を生む。重恩がある。故に汝の飯を消化するを得る。父母に仏を信ずる心はなしと汝はいうも、汝が飯を与えれば歡喜し、これによって信心を発するであろう。父母に信心を発さしめて、三帰をなさしめるならば、必ず比丘たる汝の与えた食は消化するであろう。

とされ、ついに比丘はそれに従った。無信の者を入信せしめることの重大さを意味する説話である。

この話を記した善導大師は、親の恩を仏恩より重しと見たと解釈する学者もあるが、この説話の初めに、「親を世間の福田の極、仏を出世間の福田の極」と記してあるので、飢饉の如き、世間の困難に於いての孝養を述べたもので、世間の福田としては、父母が第一とされたも

のとすべきである。

善導の疏には上述の外に、仏陀が亡き仏母摩耶夫人の報恩の為に、成道後の四月十五日に、初利天に登って夏安居をなし、一夏九十日を母の為に説法された話が記されている。仏陀の母は、仏陀の生後七日目に死去、初利天（トソツ天）に生天して、そこに止住されていた。

仏陀は成道後の夏にここに登られ、母の為に説教をされたのである。この話は、仏陀がこの初利天の説法を終えてから、金・銀・瑠璃から成る、三道の宝階を通じて地上に降りられたと伝えられるものであり、その地がインドのサンカッサであったとされることで知られている。

仏陀が孝養心の篤かったことは、仏陀を育てた養母の摩訶波闍波提の葬送の時には、自ら棺を荷負い、荼毘には香木の薪を投じられたことでも知られる。

善導大師は、仏陀の孝養を記して、その結論として、「仏すらなお、自ら恩を収めて父母に孝養をしたもう。如何に況や凡夫として孝養せざらんや」と述べられている。

中国の唐代、善導大師（六一三—六八一）の時代は、仏教の最盛時代に向う時であった。有名な玄奘三蔵がインドから帰り（六四五）、長安に大慈恩寺が建った（六四八）。その外、新旧の仏教寺院は都の各処にそびえていた。新伝来の、キリスト教（景教）の大秦寺も、翻經書院までも設備して、序聴（エス）の教えなる『迷詩所經（メシア）』が説かれ、ゴッドは仏と呼んで拜せられた。イラン系のキリスト教であったが、彼等も時代と国情に相応して、王法為主主義や皇帝崇拜主義やを適宜に説いていた。

時は末法説流行の折柄、法華・方等・觀音・金光明等の、各種の懺法が各寺院に行われていた。キリスト教の大秦寺は終南山に近い。朝まだきから、時に応じて教会の「鐘」が高くなりひびき讚美歌が静かに流れるが、それに対応する如くに、善導大師の光明寺では往生礼讃が誦せられ、法華讃が唱せられるのであった。

仏教各寺院もキリスト教の大秦寺も、大師の光明寺も、いわば官寺である。王や貴族に依る宗教に外ならないが、善導大師の浄土教は王や貴族達の外に、民衆の信仰として庶民の中に流行した。浄土往生の外に、兜率天に往生を求める信仰も流行はしたが、浄土信仰は特に、

大師の行状とその著書の『觀經疏』の説によって庶民の信仰を得て、弘まることに成功した。浄土の様子（浄土變相）と地獄の様子（地獄變相）を絵画にして、自から数百年を作られたというし、『阿彌陀經』は十萬部の書学とも伝えられる。信者の中にも、日々に一万五千から十萬遍もの念仏するのもあったともされる。やがて唐代中葉からの、民衆の念仏結社が発展する原因となるのであった。

善導大師が、国家的仏教界の重要な地位にあったことは、唐の高宗が咸亨三年（六七二）に、竜門の石窟に大盧舍那仏を作った時に、その造営の檢校に任ぜられていることでも明らかである。これは今日でも竜門を訪れるとき、大仏像裏の岩壁に「檢校善導」（善導は善導のこと）と彫つてあるのが見られる。然し、大師の念仏は、民衆の中に普及していくことに本命があり、それが今日に及んでいる。現在の中国仏教協会の代表である趙撲初先生も夫人も熱心な念仏信者である。

初め仏教は人倫に反するとされた中国に、弥陀の信仰を定着させた大師の功は大きい。そのようにならした普及の努力は測り難く大きい、その努力の一端が、上述の孝道論に見られるようである。



善導大師のみ跡を慕いて

とう どう きょう しゅん
藤 堂 恭 俊

(仏教大学教授・文庫)

善導大師の遺跡を巡る

最近、日本から中国へ渡る人は大変多い、と聞く。わたくしもその中の一人で、既に二回訪中し、中国浄土教の祖師方の遺跡を巡拝することができた。今でこそ飛行機で、まことに楽々と、中国入りできるが、その昔、中国に仏法を求めて鹿島だちした唐僧や、日本に仏法を伝えるべく中国を船出した中国僧は、文字どおり命がけで、彼我のあいだを往航したことを思うとき、あいすまない・もったいない気持ちがいってくる。

山西省太原の郊外、人里離れた幽静の地、汶水の溪流を隔てて、石壁と表現される山腹に建てられた玄中寺は、善導大師と、その師である道綽禪師と、禪師が私淑した曇鸞大師の遺跡である。荒廃していたこの寺も、革命後、中国政府の出費によって立派に再建され、幹線道路から寺に通ずる坂道も、今では拡張され、立派な舗装道路に改められ、参詣者はその恩恵に浴している。

この寺は下から上へ三段に殿堂が建てられているが、そのなかには、日本の浄土教団が寄贈した曇鸞・道綽・善導三祖師の絵像三軸を安置する建物があり、これを三祖堂と呼んでいる。老朽化したので、その再建が企図さ

れ、昨年完成をみるに至った。一昨年、澄みきった秋の夜空に満月を仰ぎながら、たかぶる感激をおさえながら玄中寺に泊った翌朝のひとつき、煉瓦を手渡しリレーして、再建工事のお手使い、とは言っても、本当にまねごとのようなことをしたことが、想い出されて懐かしい。

この寺では中国の僧侶の方たちが、音吐朗朗、南無阿弥陀仏と弥陀の宝号を称えながら行道される。あの四拍子の、のびやかな称名の声にさそわれ、わたくしも異口同唱したことは言うまでもないが、あの称名の声こそ曇鸞・道綽・善導三祖師が称えられた称名を、今に伝える伝統ある念仏の声であると思えば、一層ありがたく、感激も深い。こうした経験を持つたくしには、この玄中寺こそ日本浄土教の故山である、という感を深くするとともに、称名の一声一声に祖師の来現すら感じたことである。

善導大師（六一三—六八一）がこの玄中寺に、老齢七十五歳前後の道綽禪師をたずねて、師弟の契りを結ばれたのは二十五歳前後のこと。師から『観無量寿経』の講説を聴き、往生浄土の行業についても親しく指導を受けられたが、六四五年（唐貞観十九年）、道綽禪師は八十四歳

の高齢をもって玄中寺で入滅されたので、大師は唐の都・長安城外の南方、藍田県終南山（秦嶺）のふもとの悟真寺に入り、寒冷に汗を流して往生浄土の行業を修し、ついに三昧発得されるに至った。

大師はこの三昧発得という宗教体験をふまえて、『観無量寿経』の真精神、すなわち大聖釈尊がこの世に出現された本懐が、阿弥陀仏の本願のころを開顕し、すべての者を浄土に往生させるという一点にあることを創設した『観無量寿経疏』四巻を著わされた。この書物はそれほどばかりでなく、『観無量寿経』にたいする今古の誤解を一掃するという偉大な役割を担っている。大師はこのほか、宗教儀礼にかかわりのある『法事讃』二巻、『往生礼讃』、『観念法門』、『般舟讃』各一巻を著わしている。わたくしたちが日頃、朝夕の勤行で用いている『願我身浄如香炉』（香偈＝法事讃）や、『弥陀本誓願』（本誓偈＝観經疏玄義分）などの偈、さらには「弥陀身色如金山」という日中礼讃など、大師の著書のなかから取りだされたものが多いことを、指摘して置きたい。

大師は終南山のふもとから長安城内に入り、商業地区としてにぎあった西市近くの光明寺（懷遠坊）や皇城近く

の實際寺（太平坊）や大雁塔で著名な慈恩寺（晋坊昌）などに止って、あふれるばかりの宗教的情熱をもって民衆に、阿弥陀仏本願の大慈悲の心を説き、念仏を勧められたばかりでなく、『阿弥陀經』十萬巻を書写して結縁し、あるいは西方淨土變三百余鋪を絵図して教化の資とされた。晩年の五十九歳から六十二歳にかけて、唐高祖の詔によって、洛陽郊外、伊水のはとり竜門石窟の奉先寺本尊の盧舍那大仏造営の監督をつとめられたことは、上下各層の信望を集め、敬慕の情を一身にうけとめられたことを、物語ると言つてよい。

藍田県悟真寺や城内の光明寺・實際寺などの跡が、今どうなっているか知りたいが、よくわからないのが現状である。しかるに私たち日中友好淨土宗協会第一次訪中団の一行は、善導大師入滅後、高弟である懷惲（六四〇—七〇二）が長安城外の神禾原の地に大師の墳墓を営み、香積寺に建立した、その香積寺跡を尋ね、十三層（現在、中央に亀裂を生じ、なお上二層を失っている）の大師崇靈塔の前にぬかずき、大師のご遺徳を偲び、衷心より報恩報謝のまことを捧げることが出来て、感慨無量であった。この墓参の背景には中国仏教協会のなみなみならぬご配

慮、地域のかたがたのお世話のあること付記して感謝の意を表したい。

本年五月十四日には、日中合同による遠忌法要を、この崇靈塔前で奉修されることになっている。日中友好淨土宗協会では、このときにあたり、大師木像を製作して現地に奉安すること、崇靈塔前に大石灯籠を安置すること等を計画していることを、中国仏教協会趙樸初先生まで申しでたところ、これに答えて、十三層塔の修復とその周囲の整地、大師像を安置する殿堂の建立を発願され、目下、日中の双方でそれぞれその完成をめざして鋭意事が運ばれている。宗内では一宗あげての募財によって、ようやく大師像等の完成をみるに至り、近く輸送することになっている。読者のみなさんと共に、日中合同法要がつつがなく奉修され、日中双方が互いに心のきずなを強固にせんことを願いたい。

善導大師のみ教えを受けて

大師の遠忌法要を中国の西安で、日中合同で奉修すると聞けば、それなりに親近感を持つと共に、有意義なこ

とであると思われるが、なんといっても、大師は私にとって、千三百年以上昔の人である。今この世に住む私とあまりにも、かけはなれているように思われてならない。しかし大師の浄土教信仰が、人間の性をふまえている宗教であることを知るならば、その杞憂は一掃されることであらう。

人には老若・男女の差があるばかりでなく、さらに善悪・賢愚・美醜等の差がある。だから人は、人をいろいろにランクづけする。中国では古く『漢書』の「古今人表」よりこのかた、人物を上品上から下品下に至るまでを九品に分けて人評しているか、それはこのランクづけに外ならない。大師は『観無量寿経』に説く九品の差別を認めながらも、すべての人は人間の性の持ち主であるから、皆ともに凡夫であると言いつついる。人が生まれながらにして等しく具有している人間の性は、それを自制することができても、断ずることは不可能である。一口に自制するといっても、人それぞれによって程度の差を認めざるを得ない。いくら賢人善人と言われる人であらうと、愚者悪人と同じように人間の性を持っているわけである。大師はそのように、誰しも等しく具有する

人間の性に注目され、しかも自分ご自身も人間の性を具有する凡夫である、と自覚されたのである。

この人間の性とは具体的にいうならば、むさぼり（貪欲）といかり（瞋恚）と、道理をわきまえることができないおろか（愚痴）という三つの心のはたらきによって代表される煩惱のことである。新聞やラジオ・テレビなどの報道を見聞するまでもなく、人は誰でも、この人間の性・煩惱にふりまわされながら日常生活を送り、予想しなかった結果を招いて憂悲することが多い。人の行動はその時、その時によって貪欲が自分の主人公となり、命令を発し、行動させたり、ある時は瞋恚が主人公となり、愚痴が主人公となって、その命令に従わせる。理性の力をもってしても制禦できないことが多い。それはあたかも、洪水の濁流がいきおいあまって堤防を決壊さすに喩えることができる。言うならば、本来の自分でない煩惱によって支配されるのであるから、これ程理不尽なことはない。しかし現実はその理不尽のことが横行しているのである。

人はそうした人間の性・煩惱にふりまわされながらも、真実に生きようという願いをおこすことがある。煩

悩の水火に洗われ、焼かれながらも、真実を求めて白道を歩むことを続けることに、生き甲斐を見出している人も少くない。大師が示された二河白道の譬喩はまさにそれである。

かく綴り続けてくると、善導大師は私にとって決して遠い人でなく、私を見抜き、しかも私とともに歩け続けられているお方である、という実感を深くする。真実を求め、真実を生きぬこうとする願いがいかに強固であっても、人間の性の水火は容赦なくおそいかかって、白道を歩むことに支障をもたらすことが多い。大師はこの障礙をどのようにして切りぬけられたであろうか。阿弥陀仏の信仰に生じられた大師は、阿弥陀仏の脇侍である観世音菩薩が、常に阿弥陀仏の信心をご自身の心とされていることに注目していられる。

観音頂戴冠中住 種種妙相宝莊嚴
能伏外道魔憍慢 故我頂礼弥陀尊

観世音菩薩は頂きの宝冠に、阿弥陀仏の化身を迎えられ、すぐれた種々の宝もて、御身を莊嚴し、転宗をせまる異教徒の折伏や悪魔の誘い、さらにはおごりたか

ぶり、他をさげすむ心の動きを、のこりなく降伏し給う。さればわれ、観世音菩薩が阿弥陀仏の信心を、おのが心とされるのにあやかり、わが心に阿弥陀仏を迎えたしと、伏して拝みたまつる。

この偈は大師の『往生礼讃』のなかの「中夜礼讃」の偈とその拙訳である。人間の性・煩惱に支配されるのに打ってかわって阿弥陀を自分の心のなかに主人公としてお迎えし、その指図・導きどおりに従えば、万事あやまりまく、障礙も除かれ、真実白道を歩むことができるであろう。南無阿弥陀仏の一声一声は、阿弥陀仏をわが心の中にお迎えする呼び声であり、また阿弥陀仏のお指図どおりになるまう、かけ声でもある。阿弥陀仏を自分の心の中に主人公として勧請申しあげることこそ、白道を歩む者が等しくしなければならないことである。

大師の一千三百年の遠慮を迎える今、大師が示された生き方を、南無阿弥陀仏の一声一声ごとに生きぬき、人間の性にふりまわされない真の人間に立ち直りたいと思う。それでこそ大師の真生命は、今の世に生き、人を生かすことになろうかと思う。



善導大師のお言葉を戴いて

とう だ こう しゅん
遠 田 弘 俊

(東京・小石川慈眼院住職)

○
静かに私は朝の勤行を致します時、本尊阿弥陀如来の尊容を拝し、観音、勢至の二菩薩、そして善導、法然の両大師と共に、今の自分に至るまでの永い永い時の流れを憶うて、私というものの起点から、一千三百年の歳

月、何という遠いことであろうかと考えます時、久遠劫の昔、法蔵菩薩の誓願から、阿弥陀如来として、今の私に呼びかけて下されている大きな御声、これが大河の流れとして滔々と尽きない簞を耳の底に感ずるのであります。このことを思いますと、善導大師様の偉大なる御徳が今さらのように偲ばれるのであります。一千三百年

前、それは大唐長安の都、一代の聖僧として、釈尊八十年の教えの中から、五部九卷というお書物にお纏め遊ばされて、釈尊出世の本懐は、偏えに阿弥陀如来の御誓願を知らしめようとお思召しであったのだということを徹底的にお説きなされ、而も身を以てお示し下されたのであります。

時の人々は、善導大師は阿弥陀如来の化身なりとまで讃歎しました。

この時私は、私の頭上に美しく輝いている照明の光を見たのです。毎晩、仏前を照す光は、まことになくはならぬ電灯のおかげだと思ふのです。これを当り前のこととして、平素は心にもかげず、日が暮れるならば明り

がつく、スイッチ一つでいつでも暗から逃れることが出来ると思つています。然し、この光の根源を辿つて見ます時、まことに遠く流れのあることに気づくであります。今さらに申すまでもなく、少し心ある人は、あの溪流のささやきから滔々と落つる飛瀑の轟、その大きな力を、この光にまで導いた人間の慧知、一朝にし語ることが出来ません。ただ水の力や、火の力があるからと申して、この有難い恩恵に浴することが出来るものではありません。いかに多くの人々の苦勞と犠牲の上に立っていることでありましょう。而もそのことに気づき、そのことを遺された先人の方々を憶う時、私は再び自分に歸つて、段上の御仏を泌み泌みと拝するのであります。阿弥陀如来が四十八願成就の現身仏として、今も浄土に於いて說法遊ばされ、凡ゆる方便を使つて私達に呼びかけて下さっていますことは、知るも知らざるも差別はありません。唯この私に、そのことを気づかせて頂き、その喜びをお与え下されましたのは、お釈迦様のお出ましであり、而もその御教えの中から、特にこれこそその仰せは、善導大師に依つて明らかとせられたのであります。所謂、この仏前の照明でも、スイッチ一つの在りか

を知らず、それを教えて頂かなかつたとすれば、百年経つても、部屋は明るくはなりません。



此の度、大本山増上寺布教師会で『善導大師法語集』を発刊せられて、有縁の人々に配布されました。私もこの集を拝読して、ほんとうに有難いことだと、日々勤行の折りに、宗祖大師の御法語と共に喜ばせて頂いているのであります。

第一章から第七十章までの短篇を集めて、その日、その日の糧として、心の暗を照すスイッチの役割りを果たして下されているものと頂くわけであります。その第一に「三身即一」と示して、阿弥陀様とは、まことに深い意義があるということなのです。私は今この御法語の全体を御紹介するではありませんが、大師の御一代は、あくまでも、私達が極楽に往生し、仏になることをお説き下され、そのことにお力をそがれたのだということであり、そのお言葉の一々に、明らかにお示し下されているわけであります。それに就ても、大師は、先づこの世の有様を深く觀察なされ、私達の生活の根底を探り、如

何に此の世は無常であるか、如何に私達は罪障深きものであるかということに思いを致され、掘り下げれば下げる程、阿弥陀如来の誓願の高大無辺であることを強く打ち出されたのであります。

偕而、大師は「問うて曰く、一切の諸仏三身（法・報・応）同じく証し、悲智果は円にして亦無二なるべし、方に随つて礼念し、一仏を課称せば亦まさに生ずること得べし、何が故に偏えに西方を歎じて勤めて礼念等を専らにせしむる何の義があるや。答えて曰く、諸仏の所証は平等にして是れ一なれども、若し願行を以て来し収むるに、因縁無きに非ず、然るに弥陀世尊本発の深重の誓願は、光明名号を以て、十方を摂化し但だ信心求会するものをして、上一形を尽し、下十声一声等に至るまで、仏願力を以て往生することを得易からしむ。是の故に釈迦及び諸仏は勧めて西方に向はめて別異と為る耳」と。

この言葉を拝しますとき、私達はいつも極楽とは何処か、阿弥陀様とはどんな仏様なのかということの質問をきくのです。勿論遠くお釈迦様が判つきりと教えて下されているのですが、世が末世となるに随つて、素直に受け入れることも出来ず、何故か、どうしてだと疑う

情けない身となったのです。

善導大師の頃でさえ、既にこのことがあったのだでしょう。その善導大師が、何とかしても今の内に確実なる教えとして、伝え遺さねばならぬとの御信念からお著し下された御書物を「五部九卷」と申し上げております。その中の最も重要な御書物は『仏説観無量寿經』を御解説下され、これを御疏と申し四卷から成り立っております。その中に、「古今楷定」と仰言っているのです。これこそ一字一句も不可加減と申して、ほんとうに大師の心血をそがれたものであります。こうしてお話し申し上げると、お話が外れたようですが、大師の私達へのお呼びかけは、「仏様とは、何時でも何処でも、此の私と共に住して下されているのだ。それは、理屈の上では三身と立てているが、それは一切の仏様方に言えることであり、それ等は皆因縁に依つて説かれ、私達が一心にこれ等を礼拝念仏すれば必ず機に應じて救つて下さることは、まこと誤りないことであります。だが最も大切なことは、阿弥陀仏の発願は、私達の機根、即ちいつも乱れて定めぬことに気付くならば、偏えに西方に想いをかけることが肝要である。お釈迦様の御在世の頃は、お

釈迦様自らが仏として、衆生の為に教えをお説き下され、誰も疑うものがなかったのです。彼の有名な韋提希夫人の物語りに致しましても、眼の辺りに浄土の莊嚴を拝した夫人が、その身の体験を、仏の滅後に於いて、世の人々がどうしたならば、この境界に到達出来るだろうかととの問いに対して、釈尊自ら説いて下された経文が、『觀無量壽經』でありました。こうして説かれたお経を、善導大師様が、どうしても末世の私達に、納得の出来るよう、いかにしたならば易く極楽に往生が出来るか、それは唯一心に称名念仏より他にはないのだ。それは阿弥陀如来の誓願だからである。仏の願力に依るならば、上は一生を通じ、下は一声、十声の念仏でも往生が出来るのである。だから西方を欣求すより他に求むる道はないのだ」と、仰言っているのです。

○
阿弥陀様は何故に西方に浄土を建立なされたのか、何故に西に目標を定められたのか、それは私達の心が最も定まり易い処だからであります。ほんとうに万物の帰するところが西方であります。私は朝起きて先づ朝日を拝

む。日の出より遅くは相済まぬ。そして夕日の沈む西を憶う。私達はやがて終らねばならぬ命、一日の働きが一生の働きとして考える時、人生の究極はやがて沈み行く太陽の如く、安らかにそして美しく、心から喜べるならば、阿弥陀仏の世界、極楽浄土を、まさに西方にお定め下されたことの貴さを感じずにはいられません。而もその行として称名念仏を第一となされたことに就いて、この私が勤める上に、最も適当であり、何時でも何処でも、着のみのままです。光明名号撰化十方と仰せられ、大師が常に称名の大切さを身を以てお示し下されたのであります。大師の御尊像を拝します時、一称に一仏を拝し、空間に阿弥陀如来の出現があったのであります。私達はこうした貴いお話を承ります度に、宗祖法然上人が「偏に善導一師に依る」と仰せられた御心が拝察出来るのです。上人の御歌に「月影の到らぬ里は無ければども眺むる人の心にぞすむ」とありますように、どこまでも称える念仏こそ往生への唯一の道であります。かの二河白道のお譬えにもありますように、愚かな私、薄弱な私ではありますが、阿弥陀如来のお召しの御声、そ

の声を、今称える私の声の中に聞く思いであります。ほんとうに短い告白であります。宗祖大師の真葛ヶ原での御対面を想起する時、私達が浄土宗の信仰に生きることの有難さを深く感謝すると共に、一千三百年の往昔を偲んで日々お念仏させて頂き度いものであります。かの親鸞さまが「善導独明仏正意」と讃えていられます。大師を忘れては念仏の法門は今日の隆盛を見ることが出来

ず、猶将来への礎とならねば、末徒としての責を果すことが出来ぬと確信致すのであります。

私の恩師量誉上人（故岸信宏大僧正）の御歌に、

み名となふ仏の教ときませし

善導大師とほきみまつり

合掌。

◎『浄土』表紙版画販売についての案内

この度、新しく版画家の土屋正男先生をお迎えして、『浄土』の表紙をユニークな版画絵によって飾っていただくことになりました。さて、ご承知のように版画そのものは一枚の原版によって、数枚の印刷が可能です。そこで弊会では、土屋先生のご好意に甘えて、版画絵を豪華額縁に納めて、限定販売いたすことになりました。

領布価格は、額縁代・包装費等をあわせて、二五〇〇〇円です（送料は到着払い）。ご希望の方は、前金にて、当法然上人鑽仰会の左記の住所及び振替欄にお申し込み下さい。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。

（申し込み先）〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替（東京）八―八二―一八七



彼岸俳談

○ 春分

「暑さ寒さも彼岸まで」といい古るされたように、彼岸になるとようやく寒さから解放され、渡り鳥の鴨は北国に去り、また南からは燕が訪れてくる。彼岸は春分と秋分の日の中日をして七日間というが、俳句の季節として、彼岸といえは春の彼岸をいい、秋の彼岸は秋彼岸という。

両彼岸の中日は祝日になっている。昭和二十三年七月二十日施行された国民の祝日に関する法律では、春分の日の方を「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」とし、

ほそだりゅうぜん
細田隆善

(東京三好勢至院住職、俳号豊明)

秋分の日を「祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ」と分けている。しかしこれは先祖を大切にする彼岸に対する古来からの国民感情を背景として制定されたもので、祝日の意味を重複しないように分けて定めたものである。春分は、中日、時正ともいう。

春分や走り咲きなる寺桜

時正の日獵師の茶の子貫たけり

春分や進みがちな花時計

天守 嘯山 豊明

○ 彼岸

俳句の季語として彼岸は、お彼岸、彼岸中日、彼岸太郎、入彼岸、さき彼岸、初手彼岸、終い彼岸、彼岸ばらい、彼岸前、彼岸過などという。

彼岸の根拠は『観無量寿経』の日想観である。かの章提希夫人がわが子に幽閉されたとき釈尊に救いを求め、西方浄土に往生したいと願い、その西方浄土を見る方法を問われた。釈尊は十三の方法を説き、その第一に日想観を説かれた。それは西方に向って正座し、西方浄土を思つて専心に落日を見つめることである。落日し終つても太陽が臉に残るように浄土を見ることができると説かれた。落日の地点は毎日少しずつ移動するので、春分秋分の日に浄土を思つて日想観を行えば、真西の浄土を指向することができることから、彼岸の行事が普及したものである。

精進すなといはれし親の彼岸かな

彼岸前寒さも一夜二夜かな

我村はぼたぼた雪の彼岸かな

毎年よ彼岸の入に寒いのは

人界のともしび赤き彼岸かな

鬼貫

杉風

一茶

子規

遷子

お彼岸や絶交の姉妹搦合へる

豊明

○ 彼岸 寺

彼岸には墓参のため寺が賑わう。俳句の季題では、彼岸寺、彼岸詣、彼岸参、彼岸会、彼岸道、彼岸墓地、彼岸囃子、彼岸団子などという。

彼岸は仏教行事の中で最も普及した行事であるが、古く聖徳太子の時代から始まったともいわれている。しかし明確なのは延暦二十五年（八〇六）二月、官命によって春秋二期七日間、『金剛般若経』を諸国の国分寺において誦経したのが始まりである。平安時代になると彼岸会が各宗において行われ、墓参がひろく行われるようになった。

信濃路は雪間を彼岸参りかな

鳶の輪の下に鉦うつひがんかな

お彼岸の夫婦仲よきかたあかな

いろいろの墓見歩くも彼岸かな

未亡人と見てうら若し彼岸道

彼岸囃子児が飴のある口で泣き

也有

大江丸

暁水

喜舟

占魚

みよ子

開伽手桶忘れ置かるる彼岸墓

豊明

○ 六 阿 弥 陀 詣

春秋の彼岸に六阿弥陀の安置してある寺々を巡拝することを、六阿弥陀詣といい俳句では春の季題である。

六阿弥陀の寺は江戸および近郊のつぎの六か寺であり、江戸時代彼岸には大変賑ったものである。この六阿弥陀に順じて各地に六阿弥陀ができた。

- 一番 西福寺 北区豊島二丁目
- 二番 恵明寺 足立区江北二丁目
- 三番 無量寺 北区西ヶ原一丁目
- 四番 興楽寺 北区田端一丁目
- 五番 常楽寺 台東区池之端四丁目
- 六番 常光寺 江東区亀戸四丁目

鎌倉時代、豊島郡地頭の豊島清光の妻は、足立郡地頭の足立正成の娘足立姫であった。ところが両家が不和となったため、姫は荒川に身を投じ自殺してしまった。姫の侍女たち十二人もつぎつぎに荒川に身を沈めてしまっ

た。このことを、姫の可愛がっていた猿が正成に知らせた。正成はあまりのことに驚き、姫以下十三人の菩提を弔うため出家し、かねて信仰していた紀州熊野神社へ参詣した。熊野でみた霊夢のお告げに、「ここに光明を放つ霊木があり、これを正成に与えるから、行基菩薩が汝の国を巡って来たとき、六体の阿弥陀如来を彫ってもらって供養せよ。これによって十三人は成仏する」といわれた。翌日境内を探すと光明を放つ霊木を発見した。正成は自らの名を刻んで国元へ着けと海に放った。国元へ帰るとこの霊木が漂着していた。間もなくこの地へ行基菩薩が来られたので、早速この由来を語って、六体の阿弥陀如来を本尊とし安置したのが六阿弥陀の寺々である。『江戸名所図会』に亀戸常光寺の六阿弥陀詣の挿絵が載せてある。

野の道が梅から梅へ六阿弥陀

子規

六阿弥陀詣少し常光寺

豊明

この六阿弥陀詣は、彼岸に大変賑わったが、足違者でなければ、一日で全部回することはできなかった。江戸時



一常光寺の六阿弥陀詣（『江戸名所図会』より）

代つぎのような川柳がある。

六阿弥陀嫁の噂の捨てどころ
六阿弥陀みんな廻るは鬼婆ア

○ 春 社

春分または秋分に最も近い前後の戊つひのえの日を春社または秋社という。これは神社で土地の守護神及び祖霊を祀る行事であり、寺院の行事の彼岸と結び付いたものである。俳句の季題では社日、社日様、社日詣、社日潮斎しやうさい、社翁の雨、社燕などという。この日雨の降ることを願ったものである。これは春耕したり、種を蒔く時季でもあるからだ。

お社日や門田かどなの土を神の棚
鷲とびついと社日の肴さかな領しけり
藍かめの機嫌も祝ふ社日かな
村口に土橋の雨も社日かな
爪を剪る馬寄せのある社日かな
土公神の碑は風化せり社日詣

八重楼
嘯山
井月
東洋城
桜硯子
豊明

○ 彼岸 西風

彼岸の前後に吹く冬の季節風の名残りを俳句では彼岸風という。西方浄土の方向から吹く風であることが彼岸と結びついたのである。

彼岸西風炎のごとく塔登る

寒々

彼岸西風同胞かくも老い集ふ

いた子

彼岸西風泥掴みたるまま捨て軍手

豊明

○ 彼岸 潮

彼岸は一年中で最も干満の差のはげしい大潮であるので彼岸潮という俳句の季題となった。月と地球と太陽が一直線に並ぶので起潮力が大きい。潮差の世界一は、カナダのファンディ湾奥で十五メートルに達する。

湯の町の護岸を越ゆる彼岸潮

豊明

○ 彼岸 桜

桜の中で最も早く咲き、彼岸のころ開花するのでこの

名がある。糸桜ともいう。

ゆき暮れて雨もる宿やいとさくら

蕪村

尼寺や彼岸桜は散りやすき

漱石

明るさの彼岸桜やひと待まず

草堂

捨草鞋彼岸桜のこぼれけり

東雲

寺の堀一枝触るる彼岸桜

豊明

○ 彼岸 河豚

彼岸河豚は菜種河豚ともいい、春の彼岸のころまた菜種の花の咲くころに産卵するのでこの名があり、俳句の春の季題になっている。河豚の毒性は、初秋のころが最も弱く、彼岸河豚は普通食べないが、毒性の強い彼岸のころの味が最高であるという。

人中に嘲られたり菜種河豚

康治

魚市や花鳥賊過ぎて菜種河豚

葛堂庵

捨てられもせず生簀の菜種河豚

白兎

彼岸河豚三津五郎のこと思ひ出づ

豊明

表紙のことば

「貝 寄 せ」

土屋 正男

日本のきものの模様やお菓子のデザインに、貝がらを集めた「貝寄せ」がある。

「貝寄せ」は春の季語だそう。

山の秋のおち葉、木の実の風に吹き寄せられた姿をおもしろいとみたり、春の海辺に散り敷く貝がらをあつめて、貝寄せと打興じる心を私はすばらしいと思う。

貝寄せとは、大阪四天王寺の聖霊会の舞台の花を難波の浦べに吹き寄せた貝がらで作るというので、この頃に吹く風を「貝寄せ」という。

この風が吹くとき竜城の魚介の族が仏縁に感激して難波の浦に浮び出ると古人はみた。

季節の浪風に魚介の類が浜に打上げられただけの自然の一現象にも古人は心を移して受けとめる。

今人は科学的非情な観察に歪められて人間だけの慾得のために自然を打算し、破壊する。

自然の鉄鎚も受けず、この冒瀆を続ける限り人間は二河白道を無事渡ることは適うまい。

随想——“おどじ”と“まるじょう”

合ごう

島じま

近ちかし

(電気タイムス社長)

『おどじ』と『まるじょう』、うちのお宝娘である。『おどじ』が中二、『まるじょう』が小六、二人とも口と足、ことに口が異常な発達を示している。

『おどじ』というのは、むろんその名の通りで、牛乳やおみおつけなど、危っなっかしくて、傍に置けなかった。それによくころんだ。年中膝頭に傷をつくっていたものである。

でも、この頃は、テニスできたええか、あまりころばなくなった。いまでこそ、「あたしはねえ、足が長いからもつれるのよ」というへらず口にも笑えるが、やや内向き過ぎるような足首を、わざわざ遠くの専門医に診てもらいに連れて行ったときは、心中おだやかではなかった。

女の子に、どじという別称は、適当でないかも知れ

ぬ。でも朝出かけるとき、「きょうは仏滅だよ。あんたはどじだからね。学校では何をやらかしてもいいから、自動車の前だけでは気をつけな」というようなことをくり返しているうち、こんなことになってしまった。一時は「あたし、もうどじじゃないのに」と気にしていたようだが、いまは平気らしい。

親の気持ちをわかってくれたのか、それとも、どじという語感も、そう悪くないわい、と認識したのか。相変らずガチャンとやっては、私に「やっぱし」といわれ、「うるせえやい」とやり返す。

ただ、一度だけ失敗したことがある。運動会で、リレーの選手に選ばれ、涙ぐましい練習を重ねたあげく、本番でバトンを落つこととしてしまったときだ。例によって、私が「やっぱし」と言うと、「だってさ」と言った

まま眼からポロリ。自分でさんざん気にしていただけにシヨックだったらしい。あとでみんなに謝った話をきかされ、改めて「スポーツは一所懸命やりさえすれば」という話をしたが、さすがに「うん、これはお父さんが悪かった」と謝まらざるを得なかった。

『まるじょう』というあだ名には、若干の説明を要しよう。テレビのCMに「わんぱくでもいい、たくましく育って欲しい、丸大ハム」というのがある。娘のくせに、まことにたくましいので『丸大お嬢さん』と呼んでいたが、語呂が悪いので『まるじょう』になった次第。

娘だというのに、四年生頃まで、よく男の子とも喧嘩をしてきた。二年生のときなど、わんぱくベスト3だった（先生談）とか。いつだったか、男の子三人を向こうにまわし、ベルトをふりまわしていた、と母親の話。夏祭りなんかでも、ねえちゃんは、浴衣姿で踊っているのに、妹は、アイス片手にあばれ廻っている。

低学年のとき、剣道——のまねごとをやっていたが、四年生になって、女の野球チームができると、いち早く参加。キャッチャーで一番バッターである。むろん、うまくはないが、「しまって行こう！」と、威勢だけはす

こぶるいい。休日など、朝六時から付き合われる。大声で走り廻ったあと、ドリンクが差し入れられると、野球よりこっちのほうが楽しみなんじゃないかなと思える顔して飲む。

なにより健康なのがうれしい。水泳もスケートも、ねえちゃんよりさっさとうまくなった。こんなことでは、いやに頭張る。だけど歌とか踊りとかはさっぱり。勉強のほうも、いまのところ、ねえちゃんよりだいたい低くそうだ。あるとき、肩を組んで歩きながら、「あんたは丈夫でいいわね。ねえちゃんは、小さい頃から、いくら注射したか知れないよ。ちっとぐらい頭が悪くても幸せよ」と言ったら、「ちっとじゃないよ」と開き直られた。「あたしはどんな高校でも、別に恥しくないからね」と言っているの、これはこれでいい。

『おどじ』は、おそろしく感受性の強い娘である。淋しがりやだし、ときに度はずれにはしゃぐ。母親に言わせると「悪乗り屋」だそう。着る物なんかも、半日歩き廻って、結局何も買っていないときさえある。

これにくらべると、『まるじょう』は、赤ん坊のときも、よく黙ってころがっていたが、いまでも、「あれ、

居たの?」と言われるようなことがある。ねえちゃんのオサガリでも、「いいよ」と言ってくる。なにか手づくりが好きらしく、ことに鉄と紙を持たせれば、何時間でもおとなしい。そのかわり、部屋は足の踏み場もなくなる。すぐに手出しをするようになったのは、一つは、ねえちゃんに口で負けるせいでもあるが、このごろは口もなかなか。先日、ねえちゃんが「あたしや、幸せだよ」と言ったら、「鏡さえ見なきゃね」と負けてはいない。

この正月、よく食ったし、運動不足もあって、だいぶ「ふとめ」になった。ナマスを山盛りにしてむしゃついているので冷やかしたら、「うるせえんだよ、いちいち」と独特の口調。そして「そういえば、お父さんは「ほそめ」だもんね」と目を細める。

『おどじ』の口達者はあきれるばかり。今年の節分には、どこからか鬼の面をもらってきていたが、「お母さん、これ貸してあげる」と言ってから、「あっそうか、お母さんはこれ要らないのか?」といった調子。「またバカにしたわね」と言う母親に、「バカにされたのがわかったの? たいしたもんね」だと。まだいっしょに風

呂に入っていた頃、母親のお腹をしげしげと見ていたが、「お母さんのお腹は、土砂崩れみたいね」と言ったのには感心した。

いつだったか、服を新調したばかりの私が、勤めから帰宅したとき、私の足もとを指差して、「あ、お父さん余ってる、余ってる」。あわてて見おろす私に、「どうしてそんなに短いの? お父さんの足は」とぬかしやがった。

調子がいい反面、よく悩みも持ち込む。ふとんに入らないで、もじもじしているからすぐわかる。風呂場もよく「相談室」になった。

「あのさあ、きょう砂場で遊んでいたのよね。そしてら百円拾ったのよ。あたしは用務員のおじさんにも届けたほうがいいと言ったんだけど、○○さんが、見せてって言うから渡しちゃったら、どこ行っただけ?」△△(菓子店)なのよ。そんでおせんべ買って来たの」「で、あんた食べたの?」「(語気強く)食べないわよ」「じゃいいじゃない」「うーん、でもさあ、やっぱし先生に言ったほうがいいかしら」「そうねえ、本当は言った方がいいけど、○○さん達も、いまじゃ相当後悔してると思う

よ。だから、これ以上先生に言いつけたら、かえってま
ずいんじゃない」「あ、そう」ホツとして、とたんに元
氣づいた。

いろいろ欠点はあるが、この頃は上の娘も丈夫になっ
たし、ものを思う心も成長していると、親としては満足
している。

上の娘が六年生のときだ。かねてから「スケートに連
れてって」と言われていたので、近くへ出かけた。「お
母さんも見ただけでいいからおいで」と言うのに、なん
だかんだと用事を言いたてて来ない。いささか興を削が
れたが、子供達ははずんでいる。「夢じゃないのね」に、
なんでスケートぐらい早く連れて来なかったか、と父親
は深く反省。

スケート場では、父親がえらそうな口がきけたのは最
初のうちだけ、またたく間に同情されるハメになった。

帰りに、レストランへ寄ったら、上の娘が神妙な顔を
して言う。「ねえお父さん、帰りに何か買って帰らない
?」「いいよ、どうして?」「だってさ、あたし達ばかり
食べて帰っちゃ、お母さんかわいそうなもの」「——」

小学校を卒業したときは、やはりいくぶん感傷的な

っていたらしい。庭（とはいえないが）を眺めて、詩をつ
くってた。で、その年の五月の『父の日』には、「何が
いいか」という質問に、「詩か作文をくれたらありがた
いな」「あ、そう」というわけで、五つの詩を、詩集と
してつくってくれた。そのうちの一つが、次の『父』と
いう詩である。

笑った顔

悲しそうな顔

喜んだ顔

怒った顔

いままでいろんなお父さんの顔をみてきたが

ほんとうに恨んでいる顔を

私に向けたことはない

私の兄達が、「お前は、とても娘を嫁にやれまい」と、
同情だかさげすみだか、あるいは警告だかわからない言
葉を寄せる。あるいはそうかも知れぬ。しかし、子供の
幸せは何よりうれしいのである。赤ん坊のときも、幼児
のときも楽しかったし、現在も楽しい。そして今後、い
くつになっても、きっと楽しい筈だと思っている。

浄土句集



土産神に注連縄張りし巨櫓（おけやま）
東京 坂入 等達

評 巨（おほ）きな櫓（けやま）が神苑にあるから古いお宮らしい。注連も張られ、初詣で賑かた。

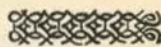
掌（て）に持てば破れ崩るる熟柿（てのふ）かな
福岡 永江 隆説

評 熟柿を喰べようと掌（てのふ）に乗せてみると、張りきっているので直ぐ破れ崩れるところをすすするのは、この上もなく美味しいのである。

増上寺山門でんと冬構
東京 栗原やえ子

評 本堂も完成した。うしろにはまた東京

一田牛畝選



タワ（たわ）が聳（そび）ている。浜松町より歩いて来ると、大本山増上寺の宮緒（みやのいと）された山門がでんとした冬構。

両の手に平戸土産の干飛魚（かじりこ）を
福岡 荒牧 還愚

評 薬で網み束ねた干飛魚は平戸名物で、有名な博多雑煮のだしに土産とする。

注連張れる神木天を突いてをり
東京 細田 初枝

評 この神木は天を突く如く、なかなか巨きいらしい。注連縄が張られて、初詣の人に仰がれる。

福岡 権藤みきを
十夜諷誦遺教（じゅうやぶつじゆ）も讀（よ）え詠（よ）まれけり

京都 安藤 寛
嵯峨の寺円く刈られし花茶垣

大分 丹羽 難中
初灯明観音すこし腰まげて

東京 星野 小登
一人居に馴れて爪引く冬の夜

東京 小笠原香祥
武家屋敷垣の零余子（せきよこ）のゆれてをり

福岡 原 敬二郎
小春日の春日大社へ両陸下

東京 原口 敬子
茶の花の和（なご）の楽しき夕餉（ゆづめ）かな

東京 新井 新生
鐘棲に人影もなく冬構

やきものの狸店頭街師走
東京 栗原とも子

葛湯くわとうなど振舞ひ老の茶話に
東京 真野よし子

初便り母つつがなしと添えてあり
山形 松田 允子

くり言ことを言ふ母相手秋の雨
東京 鈴木 葉子

冬日和三門高く増上寺
東京 田中 秀代

早発たちちの夫見送りし霧の駅
福岡 服部 光代

焚く程に今朝も積れる落葉かな
東京 阪入志津枝

喜寿にして縫初め勘の衰へず
福岡 高良 慈風

娘より転動知らず初電話
三重 山田 うた

新酒廻り皆ほんのりと上機嫌
東京 末常てる子

庫裡の縁隣の猫の日向ほこ
群馬 島津 か寿

参道の土やわらかく初詣
埼玉 佐久間愛子

さくさくと銀杏落葉を踏みにつけり
東京 吉原登起子

姑はは在まして守る慣なづかしの針供養
福岡 高良 幸代

山鳥の餌えさあさり来し寒椿
山梨 青山富貴江

嬉しさの朱線重ねし日記果つ
東京 猪瀬 幸子

有難や今年も姑ははのせせち料理
三重 森 静枝

みだれ打つ音に窓開く寂かな
福岡 上滝津弥子

師の墓に読経流れて散り紅葉
東京 真野 竜

初孫の誕生待つや寒椿
東京 吉田ゆきゑ

隙間風よけたるところ母の座に
山口 三井 寛静

空澄みて物干す肩に赤蜻蛉
東京 島居 千代

年忌礼はがし貼られて年移る
山形 松田 光替

娘に甘へ婿に甘へて春眠す
一田 牛畝

勝縁

はっ
とり
せん
じゅん
服部仙順

(東京・本郷昌清寺住職)



時代であります。

昭和五十五年三月十四日は、浄土宗の高祖善導大師の一千三百年の遠忌の正当日であります。本年は浄土宗の各寺院で記念の行事が盛大に行われ、特に五月十四日には善導大師の墓塔のある中国・西安(昔の長安)郊外の香積寺の崇霊塔前において、浄土宗の代表者によって遠忌法要が厳修されることになっています。

善導大師は浄土宗祖法然上人の師であります。年代が四百五十年も前の方で、隋の煬帝大業九年、泗州(安徽省)に生誕されました。丁度日本では推古天皇二十一年、仏教を弘められ熱心な信仰者であった聖徳太子の

善導大師は幼少にして出家し、青年の頃、浄土の麗し
い有り様の画かれた五通曼荼羅を見て浄土の信仰に憧
れたのであります。二十九才の時、山西省太原市の西南
六十料にある石壁山玄中寺で『観無量寿経』を講誦され
ている道綽禪師の九品道場に入られたのであります。が、
時に晋陽、太原、汾水三県では道俗七才以上の者は皆念
仏を称えたといわれる程に、禪師の名声は弘く、自らも
念仏の数を取るために、阿弥陀仏の名を唱える毎に小豆
一粒を隣の室に投げて勘定されたといわれております。

善導大師はこの道綽禪師を師と仰ぎ、浄土の法門の奥義を伝授されてのち、終南山の悟真寺に入って、『観經』の十六観相を修得され、長安の光明寺において念仏を説かれたのであります。そして六十九才で香積寺において示寂されるまでの間、『観經疏』をはじめとする五部九卷の著作をし、『阿弥陀經』を写経すること十萬卷、浄土の変相を画写されること三百幅におよび、毎日十萬遍の念仏を申されたのであります。あたかも玄奘三蔵が印度より經文を持ち帰り、同じ長安の慈恩寺で翻訳され



— 善導大師 —

ている頃のことです。念仏三昧を発得された善導大師が念仏をお称えになりますと、一声一声に阿弥陀様のお姿がお口から出現されたといわれ、長安の都は念仏の声が満ち満ちたといわれております。

近年、中国と浄土宗との間に日中友好浄土宗協会が設立されて、今や中国仏教協会の厚意によって、寺は修理され道路も整備されつつありますことは、まことに勝縁と申すべきであります。特に曇鸞、道綽、善導大師の浄土三祖ゆかりの玄中寺、並びに善導大師のなくなられた



— 法然上人 —

神禾原の香積寺の靈塔は、日本浄土教のメッカであり、整備が進むにつれ参拝者も後をたたないでありました。この三祖によって法然上人が浄土宗を開かれ、弥陀の信仰が日本人の血となり肉となって生きているからであります。

然るに、法然上人が浄土宗を開かれるには、三十年間の永い苦しみの求法の生活がありました。上人九才の時、父の非業の死にあい、その遺言によって出家し、十五才で母と別れをつげ比叡の山に登り、各師について勉強され、十八才以後は西塔黒谷の経藏で仏教の諸經典を繰返しお読みになり、その間南都にも遊学されたのであります。

しかし、この末法の時代に、戒定慧というような難しい修行の出来る人だけが救われるならば、それ以外の人の救われる法門はないかと、名僧智者をたずねられたが教える師も示す学者もありませんでした。救いの道を探し求める四十才にもなる上人はもがきと絶望にうちひしがれていたことでありましょう。なげきなげき経藏に入り、悲しみ悲しみ經典を手にしたのが、善導大師の『観経疏』（『観経』の注釈書）の一節でありました。

「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定業と名づく。彼の仏の本願に願するが故に」という文をお読みになつて、感悦落涙千行されたといわれております。われら無智の凡夫でも一声の念仏によって浄土に生れさせていただける、それは阿弥陀様の誓われた願いになつてゐるからである、と。この善導大師の教えに、悩み探し求めた救いの道を発見された上人の喜び感激はいかばかりであつたでしょう。ひとえに善導大師の教えに身も心もまかせられ、かけがえのない師となつたのであります。

このことわりによって浄土宗を開かれたのが、今から八百年前、上人四十三才の時でありました。貴族仏教の色衣を脱ぎ捨て、直ちに山を下りて街に出て念仏の易行を説かれたのであります。かくして念仏の声は、わが国にも津々浦々に弘まっていきました。

ある夜、上人は夢に、空中に紫雲がたなびいているのをご覧になりました。まもなく、その紫雲が近寄つてくる。上人は不思議に思い、しばし見まもつておられました。その雲の中から突然高僧が現れ、上人の前に近寄つ



一河白道一

てこられた。そのお姿は腰から下は金色、腰より上は墨染の衣。法然上人は合掌し頭を低くして申されました。「どなた様にましますか」と。その僧答えて「我は善導なり」と。「なんのためにおいでになりましたか」と。善導答えていわく「法然なんじ専修念仏を弘むること貴きが故にきたるなり」と。そして法然上人はその尊容に合掌され、夢はさめました。早速乗台という画家に、その夢に見るところを画かしめたのが、世に配布している半金色の善導大師と黒衣の法然上人の二祖対面の絵像であります。

今から十年ほど前、自坊の本堂を建立した年のある日、日本橋のある処に、額縁におさまった半金色の善導大師の古色の絵像がかかっているのを見て、私、はっと驚きと忽体なやの気持で、その前かけ寄り、手を合せました。係の人に、もう一幅ありますでしようといいますと、はいございますという。持って来てもらいますと、黒衣の法然上人の絵像です。ありがたや、不思議の勝縁と、すぐ譲り受け、現在本堂内陣の左右に掲げてあります。たけ三尺、幅一尺四寸。額縁の標準的なタテヨコの比率でそうなるのか、大師の命日三月十四日とも解

され寺宝といたしております。

この二祖対面の絵像とならんで、親しくよく拝見するものに二河白道の絵図があります。これは善導大師が『観經疏』の中で、浄土に生れ往きたいと願う人の、内に信人を守護し、外に異学異見の論難を防ぐために譬喩として説かれたものを画いたものであります。かいつまんで述べますと、旅人が東より西に向って歩いて行きますと、行く手をふさぐ二つの河が流れていました。左手南に火の河（願の焰が燃えている）右手北に水の河（慾と執着の波浪）。中央に巾四、五寸、長さ百歩（人の一生）程の白道（清淨願往生心）があります。その人の後から群賊がヤリを持って攻めよって来ます。悪獸もおそいかかってくる。行くか戻るか。異学異見の輩が、白道を渡れば水火の難で死するから引き返せという。しかし事ここに至っては、留まっても死、戻るも死、まっすぐ白道を歩むにしかずと、その人が意を決したその時に、東岸（お釈迦様）より死の難はないから渡れと、また西岸（阿弥陀様）より一心正念にして来れ、我よく汝を護らんと。その声にはげまされ、み声を信じ歩きますと、無事に渡ることが出来たという喩えであります。すなわち人生、幾多の煩惱

を持ちながらも、阿弥陀様に必ずお救い下さると信ずる心を堅持していけば、必ずお浄土に往生させて頂けることを教えたものであります。

私が子供の頃、生家の仏間の壁にこの二河白道の絵軸がよく掛けられていたもので、白道を渡る白衣の人が、子供心に非常に印象的に残っております。私の父母は熱心な真宗の門徒でしたので、その薫習により十一才の時親元をはなれ東京の寺に入りました。増上寺で信教大僧正より伝宗伝戒を受けて、僧侶になりましたのが、昭和五年春のこと、丁度善導大師一千二百五十年の遠忌の年でした。そして法名は、くしくもこの二河白道からとりました白蓮社道誓と授与されたのであります。

善導大師は六十九才で示寂されたのでありますが、いみじくも拙僧は、本年六十九才で、知恩院における遠忌の日中導師を拝命いたしました事、まことに忽体ない、不可思議なおはからいと存じ、有難たくお受けする事にいたしました。当日は、随喜寺院諸大徳ならびに檀信徒の皆様のご参列をいただき、この千載一遇の勝縁をつつがなくおつとめ出来ますよう、心より念じております。



念佛ひじり三国志 (主)

—法然とゆづる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

「私は極悪人です——」

地の底から湧いて出るような声音であった。

いったい誰が、こんな言葉を。

生仏は全神経を耳にして、極悪人だと自称する者の正体をとらえようとする。

しかし、まぎれもなく法然の声であった。

「証空は幼い日から私のかたわらで育った者です。また安楽房も……いや、証空を害(あや)めようとする人も私の教えを信じ、助んできた。今その兩人があい争う。私自身に深い罪の根があるからじゃ」

法然ご房はすでに知っている。証空を害(あや)めると聞いただけで、その加害者を安楽房にふりあてている。

生仏は狼狽した声で、

「それは違います。お上人さまのみ教えには爪の垢ほど間違ひはございません。誤まりは兩人どもの方で、お互いに我慾が強いのです。お上人さまが極悪人など……」

「生仏どの。兩人とも我慾のためではない。どちらも真剣に仏法のことを、民の救いのことを考えている。ただ考える筋道が異なる」

「証空さまはこの京都方のお力で。安楽……別のお方は鎌倉」

生仏は話を補った。

「そうして二つの筋道に別れていった。誰が別らさせたのか、この法然です。法然が極悪人だからなのです」

純粹な信仰とそれをひろめるための政治の力。言葉であらためれば人間の「個人」と「集団」とがはらんでゐる争剋矛盾を、法然は言いたかったようである。

しかし、あとの言葉は聞き出せなかった。証空と欣西とがにぎやかに入室してきたからだ。飯びつと山芋のおろしを盛った鉢を抱えている。

「生仏どの、ごろうじあれ。この豊かな光沢を」

法然は床に起き上がって鉢のなかを覗きこむ。すりおろした液状の山芋には文字どおり「山の幸」の贅美さがあつた。

「匂いだけで、見事さがわかります」

「おお、そうじゃった生仏どのは、のう」

法然は童子のように、はしやいでいた。

どんな悦びも、悲しみでも、丸ごと受容できる人なんだ。

生仏はそんな法然觀を胸で固めている。

欣西が椀に飯を盛り、それへ芋汁をかける。

前号のあらすじ

京都方、後鳥羽上皇側の勢力にとっては、鎌倉の動きの一つ一つに大きな関心があつた。ことに「専修の徒」として、武家勢力の間に次第に浸透しつつある法然浄土念仏教団の動向も、つとに気にかかるところであつた。明遍は、こうした中で、後鳥羽院の側近たちに密告まがいのことをしながら、宗教と政治の間にはさまつていまだに暗中摸索をしていた。安樂房邊西のことなどを鋭く嗅ぎ取ろうとする、あの那智ノ校校の貪婪さに、ことのほかの気難いを感じながら……。

盲目とはいえ、今は広隆寺の宿房に身を寄せる生仏にしても、その立場は明遍とそれほど変らぬものであつたといつてよい。ただ盲目ゆえの身の不自由さと、そのひたむきさが、念仏信仰への純粹さにおいて確たる信念と、また鋭い洞察力をもたらしめているのかもしれない。一日明遍たちとの会話で感じとつた善惠房証空への疑念を抱いて東山を訪れると、師の法然上人は静かなる老病の床にあつた。

「塩、塩をたっぷりまぶしておくれ。病んだせい、近

ごろやたらと辛らしいものが欲しい。塩じや」

「お師匠さま。塩などと無粋な。これがございます」

欣西は干魚を法然に示した。

「やあ、干鰯か。そんな珍貴な品があつたのか」

「九条家から届いたものを、今宵のために、とっておき

＜上人法然をす碗＞



ました」

干し鰯を千切って、芋汁のなかへ落した。北国の海で獲れた魚はたっぷり塩をまぶして干してあった。

法然は舌鼓を打ちながら芋汁の飯をむさぼり食う。眼には見えぬが、生仏にはその「むさぼる」さまが手に取るように判る。

「もう一碗、所望するか」

空になった碗を突き出した。

「たっぷり召し上がれ。病いなぞ、じきに治ってしまわれます」

食欲が回復した師に、欣西の声もはずんでいる。

「こんな美味な物を食せるのも、極悪人ならではじゃのう」

「極悪人……さよう、お山の精進潔斎の阿闍梨さまでは、干鰯まで食せませぬ。精進潔斎が崩れます」

欣西は、法然の言葉を狭義に受けとめているようである。

「幼い日であった。あの夕餉も山芋のおろしじゃった。みんな楽しく、にこやかに食していましたぞ、生仏どの」
俄かに法然は生仏へ向って語りかけはじめた。

「みんなとおっしゃいますと？」

「父も私も私です」

「お父さまが未だお元氣のところですね」

「元氣も元氣。腕を何杯もおかわりをし、これを沢山食すれば丈夫に育つ、と私にさとしたりしていた。それから隣りとの所領争いのことも、じっくり話し合つて解決する、と言っていたそう。あとになって母から聞きました。その晩なのです。父が襲われたのは……」

「その晩のですか。お父上が危難にお遇いなされたのは」

証空の声は叫び立てるようであった。

法然の父が隣地の領主に襲われて横死した事實は、証空たちも兼々聞かされていた。それにしても美味な芋汁を食しながら、その嫌な思い出を語りだす法然の氣分は測りがたかった。

「うかがったところでは……」

と生仏は、父漆間時国の遺言にふれた。

絶対にこの復讐をしてはならない、と時国は苦しい息の下で幼い法然にさとしたのであった。

法然はもの静かに語り継ぐ。

「父は、たしかに言った。絶対に復讐をしてはならない、と。私はその言葉を四十年近くも背負っていたんですよ。比叡山へ登り、仏法を学びながら、復讐するな、とはどういうことなのか。親が殺された。子が仇討ちをする。こんどは相手の子が復讐してくる。これでは悪因縁が未来永劫まで流転してしまふ。だから断絶せよ。お前の代で断ち切れ。周囲の先輩たちはこう説いてくれた。たしかに經典にもそう書いてありました。しかし、それだけで解決できるのか、私は迷い、悩んだのです」

復讐を遂げた人間は、われ「正義」をつらぬきたり、と満足する。父の遺命を守つて復讐心をおさえこんだ自分にしても、われ悪因縁を断ち切つて「正義」とつらぬきたり、と誇りに思う。

「この正義です。この満足や誇りが、人間を乱します。おのれ一個人は満足できても、そのかげで周囲がどんなに傷つき、迷惑しているでしょうか。間違ひはおのれを正なる者、秀なる者、と思ひこんだところに発しているのです。私は善導さまの観經疏に触れたとき、ハツと目をさまされた。私は下品下生、下根の極惡人なのだ。だから阿弥陀如来の慈悲によつて救われる。極惡人になり

きれた者こそ、多量の愛を阿弥陀さまから与えられる」
法然は、未だ箸をつけていない二椀目の芋汁飯にあわ
てて視線を落とした。

「さめてしまったでしよう。お取りかえします」

欣西が手をさしのべた。

「いや、さめた飯の味もまた格別じや。残り物のうまさ
での中」

昨夜の残りを翌朝、もう一度食べる、という意味であ
ろう。きわめて庶民的な楽しみ方であった。

「さよう……父の教えが、最後の夕餉、汁飯にまざまざ
と残っている」

法然は楽しげに箸を使いはじめた。

二

生仏はその晩、大谷の禅室に泊った。

供の喝食は着いた夕方に広隆寺へ帰っていた。生仏の
心づもりでは、このまま三晩四晩でも泊ってゆこうと思
った。安楽房と証空とをじかに対決させて危険な雲行き
を一掃しておきたかった。

だが、安楽房がなかなか現れない。証空はあのまま在

房だから、彼さえやってくればことは進捗するのである。

二晩目を送った朝である。

生仏はみんなが起き出す前に床を離れ、禅室の前庭へ
出た。

前庭とは言っても特別な庭園が造られているわけでは
ない。華頂山の山腹に建てられた三棟の房舎と山崖のふ
ちとの空地、というだけである。それでも雑草は刈り取
られ、色どりのある野花が移し植えられている。

山崖のふちに立つと、眼下に京の街、南方に真葛ヶ原
が俯瞰できた。

むろん盲目の生仏ではこの前庭を視点で楽しむことは
不可能だ。足先を濡らす草露や野花の匂いのなかに早朝
の気配を嗅ぎとるだけであった。

「生仏どの、そちらは危い」

突然、背後で声がした。気づかぬまに、山崖のふち近
くへ歩み出していたのであろう。

「お上人さま。もうよろしいのですか」

生仏はふりむきながら深々と頭を下げた。呼び止めた
声の主は法然であった。

「芋汁飯がきいたのか、気分がすっかり好くなりまし

た。人間とは勝手なもので、うまい物を食すれば身体も快くなる」

「それはよろしゅうございました」

「気分が好くなると、戸外を歩きまわりたくなる」

法然の息づかいが間近く感ぜられた。

「一昨夜のお話、心に沁みました。私たちはうっかり国法にふれなければ自分が善人だと思いこんでしまします。もっと掘り下げて考えれば、自分が善人だと信じこんでいる者こそ極悪人でした」

「善人だと信じこんだ分だけ悪がつもっていることになる」

「三位中将のようなお方が、私たちは罪人だと考えてしまいます」

生仏は平家の公達、三位中将重衡を思いうかべていた。南都東大寺を焼いた張本人と目されて、法然の説教を受けたあと処刑されている。

「さよう、私たちはいつでも事の次第と成行きで、重衡との立場に立たされる。かりに法然が重衡どのの身になり替っていたとしたら、やはり平相国の命を受けて南都を焼いていたことでしょう。ひとりだけ馬をかせしてみ

ても、配下の者が……また、あの場合には中将の手の者というよりも追いこまれた衆徒たちが大仏殿に火をかけて平氏の攻撃を避けようとしたとも言われています」

「お上人さま、そういう極悪人どもが集って、この世の中というものを作っているのですね」

「そうです。釈尊が末法末世と呼ぶのは、そのためです」

「私は深く経文にふれたわけではございませんが、釈尊が在世のころ、つまり正法とはどんな世の中だったのでございましょうか」

「私にもよく判りません。經典の上で理屈を組み立てることは出来るでしょうが、それも所詮はこじつけになります。唯一つ言えることは、生仏どの、お涅槃の図を見たことがありますか」

「いや……」

「おお、そうじゃ、そなたは何も見ること出来なかったのだな」

「図柄だけは、くわしく説明してもらったことがあります」

「そうですね。涅槃へ入られる釈尊の周囲には、あまねく善男善女が身分の高下を問わず、いや悪人たちまでが

＜東山より京の夕景を望む＞



集って涙を流している。そのほかにも鳥や獣、天界魔界の生き物どもも集ってきた」

「そのようにうかがいました」

「生仏どの、正法の世の中とは、人間だけではなかったのですぞ。これらの鳥や獣、天界魔界の生き物どもと、人間の心はかよい合っていた。みんなが手をつなぎ合って生きていた。釈尊はそのみんなに向って「法」を説かれた。これが正法の世なんです」

そこで法然は、善導大師の師である道綽禪師の故事を引例した。

唐の山西の地で念仏をひろめた道綽は、人間ばかりでなく鶏にまで称名念仏を教えこんだという。ためにその地方の鶏は「コケッコ」ではなくて「ナムアミトーフ」と鳴くようになったということだ。

「お互いに心がかよい合い、力を合わせて生きてきたなかで、人間だけが強大になった。智慧が進み、武器やさまざまな道具を利用しはじめた。そのこと自体は結構なことだが、心の中で悪も強まった。仲好くしてきた鳥や獣を殺して食べるようになった。そんな人間には、釈尊が説かれた教えも正しくは受けいれられない。これが末

法観なのですよ」

末法末世の思想について、これまでに何度か聞かされてきた。他力念仏の発想の原点だからである。

だが、生仏には未だ釈然としないものがあつた。

耳を傾け、心血をそそいで、釈尊が残された經典と取り組めば、きっとその正法を味得しうるであらう、と。

人間一個人の問題ではなかったものだ。自然界との対比のなかで、適確に人間像をとらえるのでなければ、この末法観は理解し得ぬ。となると、むかしの正法を正しく聞ける数少い生き物かも……。

「生仏どの」

無益なことながら法然は、山崖のふちに立つ椎の梢を指さした。

「今あそこの木立ちに鳥が群れている。ささめいている。雀であらう。何を語り合っているのか、あなたには判るか」

「はい、言葉の一つ一つは判りませんが、おだやかな気分、嬉々として語り合っていることだけは、はっきりと伝わってまいります」

「そうであらう。あなたは盲目であるがゆえに、余計な

ものを見ない。人間の心に悪を芽生えさせるもろろを見ない。あなたこそ阿弥陀如来の慈悲を最も受けいれやすい立場にいるのです。この法然なぞより遙かに間近い場所にいる」

生仏は、そこで先日の広隆寺で尾長鳥にねらわれた朝の出来事を打ち明けた。

「襲われたとき、私には鳥の姿は全く見えませんでした。しかし、梢から翔けおりてくる鳥の気配は感ぜられました。それも敵意、殺気がこもっていることも。私は袖で顔をおおいました。鳥は不思議そうにして、私のかたわらをかすめて去ってゆきました」

「不思議そうに、な」

「隙だらけな私が、咄嗟の間に防備をかためたのが不思議だったのでしょうか」

「そればかりではあるまい。防備をかためたとは言っても生仏どの、あなたの場合は抵抗しようとしたのではない。ただ身をかばってただけです。だからその鳥も敵意や殺気を失ったのですよ」

「お上人さま」

生仏は声に力をこめた。

「うむ……」

「その鳥に感じた敵意と殺気、それと同じ匂いがある人を感じました」

「ほう」

「院のご寵愛を受けている那智ノ検校という人に」

「那智ノ検校……私は知らない」

「私も最近、一度お会いしただけなのです。ただその人は、なぜか敵意と殺気をこめて、お上人さまの周辺を嗅ぎまわっているのです」

「私の周辺をね」

「しかもお上人さまの周辺では一昨夜も申しましたように内紛が日ごとつづいてきているようです」

「うむ……」

「お上人さまは、この内紛をどうやって……」

法然は房舎の方をふり向いた。

すでに起き出した弟子たちが、房舎の内外の掃除にかかっている。やがて日課の念仏が始まる刻限だった。

法然は黙って房舎の方へ帰りかけた。

ふと立ち止まると、一言だけ生仏に答えを返した。

「私には判らない」

三

安楽房が吉水の禅室に姿を現したのは、その日の午後であった。

すっかり快気になった法然は、久々に中ノ房の縁にまで出て説法をした。

何処へふれまわったわけでもない。百人近い善男善女が縁先に群衆して熱心に聞法していた。

おそらく彼らは吉水の禅室を遠巻きにして、たえず法然の動静をうかがっていたのであろう。病中は遠くからひっそりと禅室を眺め、回復して姿を現せば、われ勝ちにと集ってくるのだった。

安楽房も群衆の中にいたようである。

説法が終り人々が散り去ると、室内に坐る生仏のかたわらへきた。

「おぬし、いつから此処へ？」

「あ、安楽さま……一昨日からです」

「何ぞ用事でもできてか」

「いえ、お上人さまのお見舞にうかがったら、ついずるずると」

「お上人さまは臥せていられたのか」

「はい、起き出されたのは今朝からですよ。安樂さまはご存知なくて」

「うむ。十日以上も無沙汰になったかな」

「では、九条家のお別時もお存知なく」

「お別時？ もう済んだのか」

「はい、一昨日お勤めのようにでした。お上人さまは病中ゆえお出ましになりませんでした」

「またしても勝手な真似をしるさる」

安樂房は舌打ちをした。

このお別時、立案者は安樂房だったということだ。九

条兼実の体調定かならず、法然一門をあげて別時念仏を厳修して「厄払い」を、と安樂房が九条家へ申入れたのである。先方も乗り気で準備万端が進行した。あとは、いつやるか、日取り決定だけだった。だが、それきり九条家からの連絡が途絶えた、という。

「法蓮房どのに、くれぐれも申してあったのだが……もう終ってしまったのか」

その法蓮房信空上人が導師となつて、お別時を厳修したらしい。と口もとまで出かかる言葉を、生仏は吞みこ

んだ。要らざる刺戟は与えないほうがよい。

安樂房は奥の房へ去つてゆく。生仏もそのあとを追わないわけにはゆかなかった。

やはり久々の説法で疲れたのであらう。法然はすでに床へはいつていた。

枕辺には高足の法蓮房信空をはじめ、欣西、証空、源智らが半円型に対座している。法然は安らかに眠りつづける。この雰囲気では、切り口上に問詰もできない。安樂房は足下近くへ坐った。

「しばらく見えられなかったが」

信空がおだやかに訊いた。

「各所で六時礼讃の結集があつて、日夜まわっておりまして」

それは嘘ではなからう、と生仏は思った。

安樂房を頂点に置いて、この梵唄動習の集いは、近ごろ京一円の各地にひろがりだしたのである。生仏が関係している仁和寺女御所のグループが、すでに上流階級の「芸ごと」めいたのに比べ、近ごろ隆盛の庶民結講は強烈な念仏信仰にも支えられて、やや狂信に近い熱気を噴きあげていた。

「遵西どの、九条家のお別時は無事に終了しました」

信空は、淡々と告げた。

「だそうですね」

「九条殿下も心からお念仏の功德にひたっておられたようです。ご本復間違ひございませぬ」

「しかし、殿下の病いはお身体のものではない。ご政道と申す厄介なお頭（つむ）の病いでしょう」

「だからこそ無心のお念仏が……」

「いやいや、後鳥羽院は鎌倉調伏の祈禱を励んでおられる現状です。無心のお念仏なぞ何の効がありませんか。京と鎌倉とのこの対立を和らげるのは、それが出来るお方は九条殿下唯お一人です。勇氣と決断にみちたお念仏で廟堂の政論を統一し、鎌倉との関係を調整して、源平の争乱でむしばまれた国土を恢復しなければならぬのです」

安楽房の声は次第に高揚し、熱ばんできた。

お上人はきくと聞いていらっしゃる、と生仏は思った。

「なぜ私を除外してお別時を厳修なさったのですか」
ついに安楽房は爆発した。

「……」

信空は黙したままだ。

「それは、九条家のご意向です」

証空がかわって答える。この代弁がますます安楽房をいきり立たせる。

「九条家の誰ですか」

「誰と申して……」

「慈円座主でしょう」

安楽房は詰め寄った。

「……」

「このお別時に遵西なぞが顔を出すと、院の気色を損ずる。鎌倉のまわし者どもが密議を凝らしていた、などと疑われる。そんな配慮を申し入れてきたのでしょうか」

「慈円座主ご自身が、お別時には列席なされたのです」

証空はきっぱりと答えた。

「それで？」

「座主は専修の徒とはご同席なさらぬと明言なさいました」

「専修の徒とのう……すると信空どのもそなたも専修念仏ではないわけですか、ここにいらっしゃるお上人は、

はつきりと専修念仏をご唱導なされていらっしゃるのに」

「お師僧のおっしゃる専修と、あなたがたの専修とは、ちと意味が違うのではないでしょううか」

「専修に二義はない。一義だからこそ専修なのではありませんか」

生仏が危惧していた争剣対立が、いま展開しはじめようとしている。

でも、この方が良いと思った。法然の枕辺で公開された討論だからである。かげにかくれた武斗、暴力沙汰よりも救いがある。

「専修は一義である。しかし、それは阿弥陀仏の側に立った場合で、人間の側に立てば三義にも五義にもわからないでしょう」

答えているのは床に仰向く法然その人であった。

思わず安楽房も証空も黙りこんでしまう。師の顔だけを凝視した。次の言葉を持っている。

「わかれ、わかれでもよろしい。万人の機根が異なるように……しかし、受けいれて下さる阿弥陀仏のお胸は一つしかない。どちらが先だ、どちらが正しい、と争うこ

とさえなければ、さまざまな角度から阿弥陀仏のお慈悲に浴することが出来る。要は争わぬことです」

法然は、とどめを刺すように言い切った。

「しかし……」

未だ言いつのろうとする安楽房は、口をつぐんだ。

法然の温容を、あらためて眺め直したからにちがいない。言葉なら言葉で反撥できる。行為には行為でむくいられるであらう。しかし、床に仰向いた顔、いっさいの感情と除き去って人間のおだやかな暖い心だけを浮べている顔には抗すべくもない。

夕餉は、病床の法然を取り囲むようにして十数人のひじりたちがすべて顔をそろえ、和やかな雰囲気のなかで食した。ただし先夜のような馳走はなかった。水っぽい粥に草の実が添えられただけだ。吉水の常食でもある。

「今夜の夜伽は生仏どのにつとめてもらおうか」

夕餉が終ると法然は言った。この寝室で一緒に寝て欲しい、と頼むのである。

「はい、つとめさせて頂きます」

生仏は緊張感が差しこむのおぼえる。法然は、何かを話たいのであらう。

(つづく)

二 編集後記 二

海道

柔らかな少女の髪に春を知る ゆう一

○春、夏、秋、冬と四季は経過して、そしてまた新しい季節、春が訪れる。「探し求めた五番目の季節——それは人の心を開くもの、そしてそれはあなたの心が開かれるのを待っているのかもしれない」(映画『青春物語 ベイトンブレイス』より)。

私たちの人生には、どんな苦しいことがあるうと、また悲しいことがあるうと、生きている限り新しいもう一つの季節、春が来る。そして過ぐる季節、去りし年月、「あの人の美しさを語るためには、わたしは多くの花鉢をあがなってきた」(高橋幸雄『幼年』「燕の京」より) ようなことであっても、再び巡ってきた春が新しい花鉢をもたせらる。……これが生きるということか。身の寒さと心の貧しさをおおっていた外套を脱いで、明かるい春の陽差し中で精一杯に生きたい。

女生徒みな未完の顔に春のくろかみ

○本月よりいよいよ浄土一宗を挙げての善導大師一千三百年ご遠忌奉修のための慶讃法要や記念事業が、大々的に行なわれはじめる。日頃より念仏信仰に心を合わせていただいている読者諸兄も、総本山や大本山での大法要、あるいは菩提寺での記念法要にと、いずれかで一度は善導大師への追思のための縁を結ばれる方も多からう。わが『浄土』誌も本号を、「善導大師ご遠忌特集号」として諸先生より有意義なる貴重な玉稿を賜わり、特集記事に花を添えていただいたわけである。どうか小冊子ながら本誌を縁として、さらに広く、さらに強く、善導大師の提唱された浄土念仏の絆が結ばれることと、切に願いたいのである。一つの縁に遭って、それを私たちの身と心の奥深く確と受け止めて、ともすれば動じやすく、揺ぎがちになってしまふこの怠惰な身心に警鐘したいのである。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十六巻 三月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十五年 二月二十五日 印刷

昭和五十五年 三月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒 二二 振替東京八一八二一八七番

=新刊=

大正大学教授 竹中信常著

『私たちの浄土宗』

B 6 判 262頁 定価 1,000 円（送料200円）

◎信仰への道——浄土宗は、800 年前に法然上人によって開宗されました。本書は念仏信仰実践のための、浄土宗の檀信徒が知っておくべき基礎知識をやさしく解説しました。

『入門 寺の会計』（宮村久治著）

A 5 判 333頁 定価 2,800 円（送料200円）

『実用 仏教婦人全書』（名取盛雄著）

A 5 判 235頁 定価 2,800 円（送料200円）

『仏教常識小百科』（鎌田茂雄監修）

ポケット判 218頁 定価 1,000 円（送料200円）

好評 **寺だよりシリーズ**

「お寺と先祖供養」(No.1)

「お寺と法事の知識」(No.2)

「仏さまと生活のしきたり」(No.3)

新書判 14頁 定価 78円〈見本進呈〉

発行 創作社出版

〒 151

東京都渋谷区代々木2-6-13

加藤ビル

TEL 03 (370) 8331

振替(東京) 1-71524